

氏 名：佐々木 杏子

学 位 の 種 類：博士（看護学）

学 位 記 番 号：甲第 245 号

学位授与年月日：2024 年 3 月 8 日

学位授与の要件：学位規則第 5 条第 1 項該当

論文審査委員：主査 中山 和弘（聖路加国際大学 教授）

副査 奥 裕美（聖路加国際大学 教授）

副査 大久保 暢子（聖路加国際大学 教授）

副査 角濱 春美（青森県立保健大学 教授）

論 文 題 目：急性期病院における看護イノベーションの持続可能性に関する影響因子の特定と
その構造―背面開放座位に焦点を当てて―

博士論文審査結果

科学的根拠を伴った新しい看護ケア・介入としての看護イノベーションが開発され、その医療現場への導入が進みつつあるが、必ずしもそのすべてが日常的な実践となっているとは言い難い。本研究では、患者・家族や看護師自身の利益を維持しながら看護イノベーションを継続し続けることを持続可能性と定義し、その実践例の 1 つである急性期病院における背面開放座位の持続可能性と影響要因の関連とその構造を明らかにすることを目的とした。

研究デザインは自記式質問紙による量的横断的記述研究であり、分析対象者は 35 病院における 53 病棟の看護スタッフ 298 名と看護師長 28 名であった。目的変数を持続可能性の尺度として、その影響要因を分析した結果、個人における持続可能性は、「態度(好意的)」、「職場ストレス」、病棟全体における持続可能性には、「組織の支援・リソース確保」、「熱心なリーダー・スタッフ」との関連が示された。

審査で指摘された主な点は以下の通りである。

- ① 持続可能性の尺度における「継続」を実施状況で群分けし、継続状況ごとの分析を追加すること
- ② 「継続」と背面開放座位保持具の有無の関連についての分析を追加すること
- ③ 仮説モデルの検証において、持続可能性を 2 因子構造とした分析を行うこと
- ④ 「継続」を背面開放座位が提供されている程度とともに分析を行うこと
- ⑤ 「継続」の測定方法の限界や課題について加筆すること
- ⑥ データの正確性・整合性について確認し加筆すること
- ⑦ 背面開放座位を中止した理由の項目について、他の分析結果と合わせ考察に加筆すること
- ⑧ リーダーシップの影響が確認できなかった点についての考察を加筆すること
- ⑨ 本文における記号の使用が適切でない、持続可能性における「進化」について記述が混在している、図の表現に不十分な点があるため修正すること

これらの指摘に対して、適切に修正されたことを全審査員が確認した。本研究は、看護イノベーションの持続可能性とその要因の両方を測定し、その構造を評価した国際的に初めての研究であり、その持続可能性を高めるための方略に寄与するとして評価された。

以上により、本論文は、本学学位規程第5条に定める博士（看護学）の学位を授与することに値するものであり、申請者は看護学における研究活動を自立して行うことに必要な高度な研究能力と豊かな学識を有すると認め、論文審査ならびに最終試験に合格と判定する。